

〈教育報告〉

平成 17 年度研究課程

避妊法使用の満足度に関する研究
ー上エジプトのナガハマディ地域における既婚女性の避妊実行の動機と問題点ー

丹野かほる

A Study on the Contraceptive Usage among Married Women in the
Nagah Hammady Area of Upper Egypt

Kahoru TANNO

Abstract

Contraceptive practice and its related factors among 373 married women in Upper Egypt were studied. Among the age group of 40-49, 96.6% of women started that the purpose of contraceptive practice was to limit childbirth, while among the under 29 age group, 52.3% of women said that the purpose was spacing. This difference was significant at $p < 0.01$.

The most common contraceptive method among the 40-49 age group was IUD, while for the younger generation the most common method was the Pill (26.9%).

Among the studied women, 55.8% experienced side effect of bleeding as a side-effect of IUD use and 31.4% due to injectables. 40.0% experienced nausea due to the Pill. These differences were statistically significant at 0.05 levels.

Improved family planning services in the studied area, that addressed patients' needs, such as availability of contraceptives, accessibility of counseling, etc, led to a satisfaction rate of 96.6% among studied women, even with the side effects.

To meet unmet needs, individual counseling is important for contraceptive choice and continuous use, taking into account the user's age and purpose of use as well as corresponding to various health concerns, such as side effects, by following up during contraceptive use. Through this a guarantee of "safe and comfortable contraceptive use" can be achieved.

Keywords: side effect of contraception, unmet needs, satisfaction of contraceptive use, reproductive health, Egypt

Thesis Advisor: Takashi AGATSUMA, Noriko KATO, Kayoko HIRANO, Nobuyuki HYOI

キーワード: 避妊法の副作用, アンメット・ニード (unmet need), 満足度, リプロダクティブヘルス, エジプト

Ⅰ 研究目的

避妊実行中の既婚女性を対象に, 避妊実行の動機や問題点を明らかにし, 分析することにより, アンメット・ニードの状況を理解し, その改善とともに避妊実行率の普及を図るための方策を検討することを目的とする。

Ⅱ 研究対象・方法

現在避妊を実行している15歳から49歳の既婚女性で有効回答が得られた373名 (97.6%), 調査方法は調査員による聞き取り調査, 実施後に現地で回収した。解析方法 χ^2 検定, t 検定 (SPSS)

指導教官: 我妻堯

加藤則子 (研修企画部)

平野かよ子 (公衆衛生看護部)

兵井伸行 (人材育成部)

III 異文化における倫理的配慮

筆者は、今回の調査地域である村落で、1990年から4年2ヶ月間、国際協力機構 JICA の検診車を用いた家族計画・母子保健プロジェクトを実施した経験があり、地域特有の習慣・伝統・文化・宗教などを考慮し、調査項目の妥当性について検討し、調査前後において倫理的配慮を十分に行った。

IV 結果

属性は年齢別にみると25歳から29歳、35歳から39歳のグループ(24.7%)が多く、教育レベルは無学(68.9%)、職業は主婦(88.5%)が最も多かった。避妊実行の動機は出産制限では40歳代が96.6%と最も多く、出産間隔は29歳以下が52.3%であり年齢による有意差が見られた。将来の子供希望の有無は、希望ありは29歳以下が37.9%、希望なしは40歳代が98.3%であり、両者に優位差が見られた。現在使用している避妊法は、ほとんどが近代的避妊法でIUD、注射法、ピルの順であり、年齢が高くなるにつれて使用期間も長くなっていた。IUDの使用は年齢が高くなるにつれて使用率は低くなり、注射法はその逆であった。ピル、IUD、注射法において、29歳以下と30歳代で1%水準、IUDは30歳代と40歳代で5%水準、注射法は1%水準で優位差が見られた。現在使用している避妊法に満足している人は96.8%、不満足が3.2%であった。不満足の理由は副作用が最も多く、満足している人は、情報の入手(93.6%)、インフォームド・チョイス(90.6%)、避妊法の選択者(97.9%)、カウンセリング(97.9%)、夫の同意(94.5%)等、全てにおいて高い満足を示していた。しかし、満足していても副作用が出現した人は93名(25.8%)であり、避妊法の選択で9.7%の人が夫の拒否を受けていた。対象者373名の現在実行している主な避妊法のIUD、注射法、ピルと副作用の関連について見ると、IUD(29.3%)、注射法(28.0%)、ピル(20.3%)それぞれに副作用が見られた。副作用の症状は、IUDは出血(55.8%)が最も多く、注射法は気分不快(37.1%)と出血(31.4%)、ピルは嘔気・気分不快(それぞれ40.0%)と出血(13.3%)であった。避妊法の種類により副作用の症状も有意に異なっていた。また、過去の避妊中止経験の有無について、不満足群では58.3%、満足群では54.8%、さらに副作用がある人では60.2%の人に中止経験があった。中止した理由の一つである副作用の主なものは出血(38.7%)、身体的不快症状(21.5%)であった。避妊法を中止した特徴は、何らかの理由により避妊法を中止しても、また同じ避妊法を使用している人が約25~30%見られた。避妊法の種類は、1種類のみだけではなく複数の避妊法を体験し、その後変更して現在の避妊法に至っている人が約20%見られた。過去に使用していた避妊法の種類は近代的避妊法がほとんどであるが、伝統的避妊法もわずかに見られた。避妊法の満足に影響を与える因子についてリッカート尺度を用いたが、副作用や健康懸念に対しては、肯定・否定に意見が分かれ、考え方や態度の傾向を把握することが困難であった。

V 考察

年齢群別に見た避妊実行の動機は、年齢が高くなるにつれて出産制限を、年齢が若いほど出産間隔が目的であり、両者に優位差($p<0.01$)が見られたが、年齢が高くなるにつれて妊娠経験も多く実際にいる子供の数も多い。現在の子供の数は、29歳以下では3、3 $\pm$ 2.1.30歳代では5.6 $\pm$ 2.0。40歳代では7.2 $\pm$ 2.2であり、年齢が高くなるにつれて子供の数も多く、大家族を希望している。開発途上国とくにアフリカでは、大家族を希望することから出産間隔が短い¹⁾。イスラム社会では、出生力に影響を与える男性の力は非常に大きい。避妊法の中止経験の有無に対し、中止経験のある人のうち28.9%が妊娠を希望して中止していた。29歳以下の人は出産間隔(52.3%)を目的とした避妊が多く、将来の子供の希望の有無についても、29歳以下の若い世代の方が子供を希望している割合も高く、希望の有無についても年齢により優位差が見られた($p<0.01$)。

つぎに、避妊実行の動機と避妊法の選択について、エジプトでは①IUD、②注射法、③ピルで他のアフリカ諸国と類似している。出産制限・出産間隔を目的とした避妊法の選択は、年齢や各避妊法の効果、副作用、入手の可否などあらゆる側面を考慮し、国や地域の特性により、避妊実行の動機に応じた避妊法を選択することが重要である。副作用と健康懸念の関連性について、事前に副作用や健康への影響が説明されていても、実際に副作用が出現すると、途中で中止したりすることが多い²⁾。不満足と答えた12名のうち8名が副作用を体験していた。副作用の出現も各避妊法により異なり、IUDの利用者が最も多く、注射法、ピルの順であった。先行研究では、多くの国において最も避妊法の中止に影響を与えるのは、副作用による健康懸念である³⁾。今回の調査では、副作用の症状はIUDによる出血が最も多い。避妊法による副作用の出現は避けられないが、出現に対し適切にアドバイスすることにより、他の避妊法に切り替えたり、また、使用方法の不規則などによる望まない妊娠を防止したりすることができる。年齢の変化と共に使用している避妊法が異なることから、このような属性に応じた避妊法の正しい情報を提供することも必要である。初婚年齢が低く、再生産年齢の期間、たとえ避妊実行の動機が異なっても、できるだけ副作用の出現を防止し、あるいは出現しても適切に対応することができるように、避妊法選択肢の拡大、避妊法の正しい知識の提供と副作用の情報、インフォームド・チョイス、異常時の適切な対応方法など、対象に応じたきめ細やかな個別指導が必要不可欠である。現在の避妊法使用に満足していたグループも、過去に避妊を中止した原因の35.5%が副作用であることから、女性にとって副作用は健康への影響だけではなく、避妊の中断や望まない妊娠につながっていく。避妊の実行率を上げ、避妊効果を最大限に生かし、継続使用できるように女性の避妊環境をさらに整えていくことが重要である。イスラム社会において、女性のリプロダクティブヘルスに男性のパートナーシップは非常に重要である。また男子選好の習慣は、男子の出生を強く希望することから、男子の子供の数により、出生力や避妊に影響を及ぼしている⁴⁾。子供の数や出産する時期を決める権利は、基本的人権の一つであ

る。

イスラーム社会では、避妊や家族計画の実行に関して夫の果たす役割が大きいことは過去の多くの先行研究で述べられている⁵⁾。特に出生力や避妊に対しては、イスラーム法(規範)が影響し、考え方・行動の基盤になっている。

エジプトは、アラブ世界において最も早く人口政策を国家戦略とした国である。1988年当時の人口保健統計調査(Demographic Health Survey : DHS)では、家族計画の決定権を夫にあるとした人は25.6%にも上っていた⁶⁾。しかし、リプロダクティブヘルス・ライツ、ジェンダーの平等が提唱され、家族計画の決定権も妻あるいは双方に変化してきた。しかし、決定権が夫にあると答えた人や、避妊法使用の不満足の原因に「夫の反対」があることから、今後も夫へのアプローチが必要である。避妊法使用の満足に影響を及ぼす因子について、副作用が出現しながらも「満足」であると答えていたその背景を考察すると、アンメット・ニードの原因が除去されていたことが考えられる。十分な情報、インフォームド・チョイス、避妊法の選択者、カウンセリング、夫の同意など、全ての項目に対し、その結果に満足していた、アクセスやコストに関しても問題はない。このようにアンメット・ニードの原因が除去されていることにより、満足度の高い結果が得られたと考える。中でも、健康懸念やコミュニティの要因が重要因子である。また、女性の教育レベルや経済力が高いほど避妊実行率が上がるといわれている。本調査では無学の女性が多く、過去の避妊法中止の原因に、避妊中の妊娠(2.2%)があげられていたが、避妊法の使用が正しく行われていないことが考えられる。避妊実行の普及と継続使用を促進するための戦略として、女性が避妊法を選択する時の条件である①快適性、②安全性、③効果、④利便性、⑤安価、⑥副作用がないことを考慮し、各避妊法の利点・欠点を情報提供し、インフォームド・チョイスを保証することが必要不可欠である⁷⁾。さらに避妊法の選択肢の拡大、アクセス、施設の整備、医療従事者の技術レベルの向上、ロジスティックス等、都市と地方の格差を是正し、家族計画サービスの質の向上をさらに図っていくことにより、避妊法使用の満足が保証されると考える⁸⁾。

VI 結論

1. 現在使用している避妊法に、満足している人は96.8%、不満足の方は3.2%であり、不満足の主な原因は、副作用、不快症状、不便性であった。
2. 避妊実行の動機は、出産制限は年齢が高いグループに、出産間隔は年齢が低いグループに多く、出産制限と出産間隔に優位差が見られた ($p<0.01$)。
3. 将来子供を希望する人は、29歳以下に多く、子供を希望しない人は、年齢の高い世代に顕著であった。年齢群別にみて、子供希望の有無において両者に優位差が見られた ($p<0.01$)。
4. 使用している避妊法はほとんど近代的避妊法であり、29歳以下と30歳代はIUD、注射法、ピルであり、40歳代は注射法、IUD、ピルの順であった。

5. いずれの避妊法においても年齢が高くなるにつれて避妊法の使用期間も長くなっていた、ピル、IUD、注射法において、29歳以下と30歳代は1%水準、IUDは30歳代と40歳代で5%水準、注射法は1%水準で有意差が見られた。
6. 避妊法使用の満足群361名のうち93名(25.8%)に副作用が見られ、IUDでは出血、注射法は気分不快と出血、ピルでは嘔気、気分不快が主な症状であった。避妊法の種類により副作用の症状も有意に異なっていた ($p<0.05$)。
7. 避妊法使用において、十分な情報、インフォームド・チョイス、カウンセリングなど質の高いサービスの提供や夫の同意など、アンメット・ニードの原因が除去されれば、たとえ副作用が出現しても、避妊法使用の満足が高い。
8. 満足群と不満足群の属性の相違は、満足群では高校卒以上の教育を受けた人(26.3%)が多く、避妊の目的は出産制限(73.7%)、使用期間は4年以内(95.4%)であり、注射法の使用が不満足群の約2倍であった。一方、不満足群の使用期間は非常に長く、9年以上が75.0%を占めていた。
9. 広義のアンメット・ニードの改善には、利用者の年齢や実行動機に応じた避妊法を選択・継続使用ができるために個別指導を行い、実行中のフォローアップにより、副作用など健康懸念に対応し、「安全・快適な避妊法の使用」を保証することが重要である。

VII 謝辞

本研究において、現地でご協力いただきました Dr. Mohamed El Hawary, Dr. Amal Aly Mohamed, 調査員ならびに村の既婚女性の皆様に深く感謝いたします。また、調査票のアラビア語翻訳等でお世話になりました国際協力機構 JICA エジプト事務所の岡本茂所長、澤出恵美所員にお礼申し上げます。

本論文を最終的にまとめるにあたりご指導・ご鞭撻を賜りました我妻堯先生、加藤則子先生、平野かよ子先生に心から厚くお礼申し上げます。

最後に、国立公衆衛生院時代から長年にわたりご指導・ご鞭撻賜りました指導教員兵井伸行先生(人材育成部)に心から深く感謝申し上げます。

VIII 引用文献

- 1) Bongaats J, Johansson E. Future trends in contraceptive prevalence and method mix in the developing world. *Studies in Family Planning* March 2002 ; 33(1) : 25.
- 2) Blanc AK, Curtis SL, Croft TN. Monitoring contraceptive continuation : links to fertility outcomes and quality of care. *Studies in Family Planning* June 2002 ; 33(2) : 134-136.
- 3) Trottier DA, Potter LS, Taylor BA, Glover LH. User characteristics and oral contraceptive

- compliance in Egypt. *Studies in Family Planning* September/October 1994 ; 25(5) : 286-289.
- 4) Yount KM, Langsten R, Hill K. The Effect of gender preference on contraceptive use and fertility in rural Egypt. *Studies in Family Planning* December 2000 ; 31(4) : 290-291.
- 5) Sueyoshi S, Ohtsuka R. Ineffective contraceptive use and its causes in a natural fertility population in Southern Jordan. *Human Biology* October 2004 ; 76(5) : 720. (proquest medical library)
- 6) Govindasamy P, Malhotra A. Women's position and family planning in Egypt. *Studies in Family Planning* November/December 1996 ; 27(6) : 334.
- 7) Fortney JA. Assessing recall and understanding of informed consent in a contraceptive clinical trial. *Studies in Family Planning* December 1999 ; 30(4) : 345.
- 8) Erci B. Turkish women's satisfaction with family planning services. *European Journal of Contraception & Reproductive Health Care* Dec 2002 ; 7(4) : 231. (Proquest Medical Library)